

吉本隆明論

戦後思想史の検証

鷺田小彌太

吉本隆明論

戦後思想史の検証

鷺田小彌太

鷲田小彌太（わした・こやた）

昭17年札幌市生まれ。札幌南高（昭35年卒）をへて、昭41年大阪大学文学部（哲学科）卒。昭47年、同修士課程・博士課程了。昭50年三重短期大学講師（法哲学担当）、昭55年教授。昭58年札幌大学教養部教授（哲学・倫理学担当）。

＊〔主要著作〕『ヘーゲル「法哲学」研究序論』（新泉社・昭50）『マルクス・法哲学批判序説』（新評論・昭53）『哲学史の可能性——一つの若きマルクス論』（新泉社・昭55）『唯物史観の構想』（批評社・昭58）『哲学の構想と現実——マルクスの場合』（白水社・昭58）『イデオロギーの再認』（白水社・昭60）『昭和思想史60年』（三一書房・昭61）『スピノザの方へ』（三一書房・昭62）『現代思想論』（三一書房・昭63）『脳死論』（三一書房・昭63）『野呂栄太郎とその時代』（北海道新聞社・昭63）『ある地方博の死——世界・食の祭典'88の検証』（垂瑠西社・昭63）『天皇論』（三一書房・平成1）。

〔書評集〕『書評の同時代史』（三一書房・昭57）『矩形の鏡』（青弓社・昭58）『何を讀んだらいいか』（三一書房・昭59）『書解・現代マルクス主義』（青弓社・昭59）『書物の戦場』（三一書房・平1）。

〔編・共著〕『人間論の可能性』（北樹出版・昭58）『現代日本の教育イデオロギー』（青弓社・昭58）『人間社会の論理』（青弓社・昭60）。

吉本隆明論

1990年6月15日 第1版第1刷発行

Printed in Japan

著 者 鷲 田 小 彌 太
© 1990年

発 行 者 畠 山 滋

印 刷 所 暁 印 刷 株 式 会 社

製 本 所 山 本 製 本 所

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都文京区本郷 2-11-3

電 話 03 (812) 3131~5 番

振 替 東 京 9-84160 番

郵便番号 113

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

ISBN4-380-90222-6

一つ。戦後思想史の総体を、一人の思想家の中をくぐらせることによって展開する必然性、すなわち、思想の独自性に注目してほしい。（詳しくは、第二章、3丸山真男論、「思想家論の必然」を参照されたい。）

一つ。本書が取り上げる一人の思想家、吉本隆明は、戦後史総体を、ゆいいつ思想の可能性を信じて駆け抜けた希有な存在である。ほとんど絶後といってよい。吉本が、昭和と同じ年齢であったという幸運（偶然）と、常に「現在」に執する思考者であり続けたという必然が、この希な存在を可能にした、と考える。だから、思想の「歴史」は、よくあるようなたんなる「過去」の連鎖としてではなく、本書では、相当程度長い射程をもって未来にまで続く「現在」の連鎖としてある、と前もって約束しておく。

一つ。しかし、素材がどれほどのものであったとしても、それを述べ伝える思考者（私）の方に、吉本とある程度以上に拮抗できうる蓄積がなければ、なにほどのものも提供できかねる、といわなければならない。万全にはほど遠いが、自分を信じられるほどには研鑽を積んだつもりである。

一つ。吉本は、敗戦直後、宮沢賢治論を書き下ろそうとして、その思考の歩みをはじめた。そして、昭和を生き切ったの今現在、最新の書物『宮沢賢治』（筑摩書房・平成1・7）を書き下ろした。二つの賢

治論の間が、戦後（昭和）思想史の空間なのである。その間の思想（闘争）の厚みを吉本は歩んできたのである。

一つ。本来、本書は、第一部「戦後思想史の検証」、第二部「原理論の検証」という二部構成の一書で構想された。しかし、第一部が膨らみすぎたこともあり、二書という形を取らざるをえなくなった。三部作と「マス・イメージ論」「ハイ・イメージ論」の分析を主体とした第二部（「原理論」編）の近未来的上梓をここでお約束しておく。

一九九〇年二月二十二日

吉本隆明論

戦後思想史の検証

第一章 敗戦期の自己意識——「近代」の超克 13

1 「停滞」の意識——宮沢賢治論 13

「立場」と現実 13 逆行の二〇歳——「孤高の精神」 16

「西欧近代」と「アジア的なもの」 26 「配給された『自由』

30

2 転換点の発見——合理精神を盾として 34

3 詩と科学——言葉と自然 39

科学（数学）の相対化 39 「科学と民主主義」 43 科学と倫

理 46 言葉——小林秀雄とマルクス 49 詩と科学の「逆

立」 52

4 「近代」の超克——高村光太郎論 56

主題 56 二重の孤絶感——変革者の意識 58 「近代的転向」

——「自然」 64 「転換」——「自然」の社会化 70 近代日

本における「自我」の二面性——「超近代」 72

5 思想とはなにか——「マチウ書試論」 78

新しい思想形成の推進力——剽窃と憎悪 79 思想の核心——

「関係の絶対性」 87 近代の総体的のりこえ——ニーチェとマル

クス 90 戦後一〇年の距離——「自己清算」の道程 92

第二章 戦後民主主義の批判——「擬制」の終焉 95

1 戦争責任論——戦後文学の「敗北」 95

(i) 戦争讃歌と「抵抗」 95

戦争責任追及の構図 95 「抵抗」といわれるものの実体 104

(ii) 「プロレタリア文学」の「正規的発展」——「民主主義文学」

「芸術大衆化」論争 109 「芸術的価値と政治的価値」論争 114

109

「二段階転向」 121

(iii) 「戦後派」文学の固有な立場 123

「転向者あるいは戦争傍観者の文学」 123 「戦後派」の戦後「転

向」 130

(iv) 花田——吉本論争 138

獄外における抵抗運動 138 吉本は戦中ファシストの戦後転向者

であり、挑発者である（花田） 142
花田こそファシストの戦後
転向である（吉本） 145

2 「擬制」の終焉——ブルジョア民主主義の浸透 154

支配権力の構成変化 154
人民の意識上の変化 159
ブルジョ
ア民主主義の徹底的浸透 163
真性「民主」と擬制「民主」 164
前衛主義 168
前衛党 173

3 丸山真男論——戦後思想の総括として 177

(i) 「方法」 177

「勝利だよ、勝利だよ」 177
思想家論の必然 179
「学者でも
なく、思想家でもなく」 182
「二重性」 185

(ii) 戦後思想の課題 191

天皇制 191
大衆と理念 193
「近代」 198
ファシズムとス
ターリニズム 202

第三章 戦後思想の達成——「自立」の思想的拠点 207

1 キイ・コンセプト 207

敗北からこそよく学ぶ 209
「自立」 212
「関係性」 218
「幻想」

と「自然」 222

2 マルクス論——思想論 1 225

マルクスの読み方 225 マルクスの「三つの旅程」 229
「累層
と連関」 235

3 ナシヨナリズム論——思想論 2 239

「ナシヨナリズム」論の諸相——論理的対象以前 240 「大衆のナ
シヨナリズム」 242 迂回的接近の必然性 244 インターナシ
ヨナリズムの象徴としての天皇制 247 「ナシヨナリズム」の変
遷 249 「ナシヨナリズム」の揚棄 252

4 天皇論——思想論 3 255

「絶対感情」の対象 255 通念としての天皇制論批判 258 共
同感性としての国家 262 天皇（制）の支柱 266 「万世一系」
269

第四章 戦後思想の解体と定着——世界普遍への道 273

1 「情況」論 273

「大学紛争」	274	「文化大革命」	280	「ベトナム反戦」	283
「沖縄返還」	286	「三島由紀夫事件」	289	「連合赤軍事件」	292
「差別問題」	304				

2 書物の解体学——思考の生活記録 308

よき読み手	308	「遠隔対象性」	311	「初期条件」	315	「中
間状態」	320	「密室状態」	324	「共同性」	327	「読書」
						332

3 世界認識の方法——マルクス主義の不可能性と可能性 333

構造主義	334	マルクス主義の始末の仕方	341	世界普遍に達	
する	351				

第五章 ポスト・モダンの思考——「超西欧的まで」 357

1 位置どりの転移 357

「凡庸さ」への接近	357	「間違うこと」の意味	365
-----------	-----	------------	-----

2 「反核」異論 368

思想の「動脈硬化」か新展開か	368	「停滞論」	(①「社会主義
政治の「停滞」	②「社会主義」	思想の「停滞」	③「倫理的な言

語 ④「党派」的な言語 ⑤「反核」署名者たち 371 「反原
発」の問題 396

3 埴谷—吉本論争——「世界史の中心の構造的変化」 400

「すぐれた対立者」 400 「思想の一貫性」 403 「世界史の中心
の構造的変化」 406 「重層的な非決定」 416

4 高度資本主義論——「現在」モデル 419

「現在」にゆきつくための思考 419 「現在モデル」 424

5 柳田国男論——「アジア的なもの」 432

なぜ柳田論なのか 432 「体液の論理」——「無意識の同一性」

438 「内視鏡的な方法」 441 柳田の農政学——「アジア的」

なものの解体 446

あとがき 457

著作略年譜 あとがき 463

人名索引 「1—6」

吉本隆明論

戦後思想史の検証

第一章 敗戦期の自己意識——「近代」の超克

1 「停滞」の意識——宮沢賢治論

「立場」と現実

吉本隆明と同じように、二〇歳で敗戦をむかえた者はたくさんいる。当時は特権的身分であった大学生（吉本は東京工業大学生）で、しかも勤労動員先の工場で、天皇の詔勅と対座した者はそれほど多い数にのぼるまいが、稀だったわけではない。そして後に、吉本は次のような感想をのべているが、それも敗戦時の心情としてごく平均的な青年のものだとみなしてよい。むしろ程度を過すほどにはロマン主義的情緒に支配されていた、といった方がよい。

《敗戦の日、わたしは動員で、富山県魚津市の日本カーバイドの工場にいた。その工場には、当時の福

井高等工業学校の集団動員の学生と、当時の魚津中学校の生徒たちがいた。わたしは天皇の放送を工場の広場できいて、すぐに茫然として寮へかえった。何かしらぬが独りで泣いていると、寮のお婆さんが、「どうしたのかえ、喧嘩でもしたんか」ときいた。真昼間だというのに、小母さんは、「ねててなだめなさえ」というと蒲団をしき出した。わたしは、漁港の突堤へでると、何もかもわからないといった具合に、いつものように裸になると海へとびこんで沖の方へ泳いでいった。水にあおむけになると、空がいつもとおなじように晴れているのが不思議であった。そして、ときどき現実にかえると、「あっ」とか「うっ」とかいう無声の声といっしょに、耻差のようなものが走って仕方がなかった。

八月十五日以後の数日は、挫折感のなかの平常心のようなものであった。せっかくつくった中間実験工場の設備をこわしたり、工場の石炭を貨車につみこんで運んだりする作業をやった。無表情、無感情で、まさに生きながら死んだものは、こういう具合でなければならぬ典型的な貌をしていた。何かの拍子に笑いがかえってくると、ひどくはずかしい気がした。わたしがリアリティックに現実を認識するとは、どういうことかを、まなんだ最大の事件は、敗戦である。》〔戦争と世代〕『自由劇場3』昭34・12・1

吉本は、佃島尋常小学校四年生ごろから、今氏乙治の私塾へ通う。そこで、学習とともにかなり特異な文学書、哲学書体験を与えられ、書くことをおぼえる。「自己形成の最大場であり、自由であることの意味をおしえた最初の学校」〔過去についての自註〕昭39〕であるこの私塾へは、約一〇年間通うことになる。昭和十七年、東京を去って、米沢高等工業学校（現山形大工学部）に入学して後は、「自然」が最大の師であり友となったが、私塾で習得した精神世界のありようは、本質的には変わっていない。書物を通した詩人高村光太郎、宮沢賢治、作家横光利一、太宰治、批評家小林秀雄、保田與重郎を間接の